

天保・庄吉碑と耕地の変遷：星野村の棚田調査を終えて

服部, 英雄
九州大学大学院比較社会文化研究院：教授

<https://hdl.handle.net/2324/1515756>

出版情報：日本の原風景・棚田．5，pp.63-68，2004-07-31．棚田学会
バージョン：
権利関係：(C)棚田学会



事例研究①

天保・庄吉碑と耕地の変遷―星野村の棚田調査を終えて―

服部 英雄

一 はじめに・情景復元

筑後国生葉郡星野村広内の百姓・庄吉が結婚したのは、およそ安永三年（一七七四）の前後ではなかったか。

樺島石梁『甲申山中紀行』は、

星野村に入る。此の村と鹿子尾とは茶を以て世に名あり。

と記している。甲申は文政七年（一八二四）にあたる。これより早く、宝暦十二年（一七六二）頃には鹿子尾（黒木町）の茶が江戸大坂でも高い評価を得ていた（靈巖寺記念館文書）。星野の茶はすでに世に知られていた（以上は『星野村史・産業編』平成十年）。星野村ではなんといつでも米作り増産への期待が大きかったが、茶摘みもまた、さかんだった。最盛期、八十八夜のころは、合瀬耳納峠を娘たちが越えてくる。父庄七に先導されて、後ろ、前に振り分け荷物で坂を下ってくるお茶摘みさんの列が、庄吉の家の前から見えた。昼は茶摘み、夕去りはカマセだった。大きな釜のまえにみなが座る。最初は二股になった木の枝で、ゆっくりパラパラと、最後は団扇で茶の葉をすくう。単調な仕事だったが、仕事にあわせて茶山歌が出る。

♪ハーア、ヤアーレエエ、

縁がないならああよー 茶山にござれえ（チヨコサイサイ）

茶山 茶どころ 縁どころお（ハーア 揉マシヤレ、モマシヤレ）
♪ハーア、ヤアーレエエ、

茶山もどりはよー みなあ菅の笠（チヨコサイサイ）

どれが姉（ねえ）やら 妹やら（ハーア 揉マシヤレ、モマシヤレ）
釜を囲んで、若い二人も、やがては掛け合いの輪に入っていく。心ときめく時間だったのではないか。

二人の出会いがこの通りであつたかどうかは、むろん定かではないのだが、お茶子としてやってきた働き者の娘が気に入られて、村の若者と結婚するケースは多く、星野村の若い男女の出会いとしては、ごくふつうのものだった。結婚した二人の間に、寛政二年（一七九〇）、跡取りとなる与吉が生まれていることがわかる。庄吉は三十代の後半になっていた。何番目かの子だったのだろうか。

二 天保八年の石垣碑文

星野村広内・合瀬耳納の棚田石垣に天保八年（一八三七）に刻まれた碑文があることが知られたのは、いまから七、八年ほど前のことである。碑の存在は必ずしも昔から知られていたわけではない。

廣内村庄吉

と申者此開キ



写真1 碑文拓本

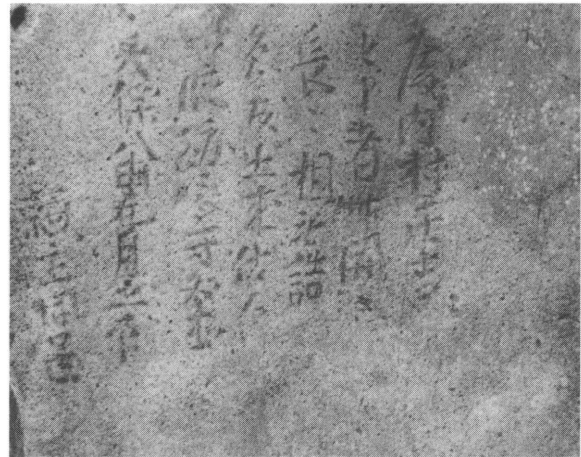


写真2 碑文写真

長々相被詰
急度出来仕候

此段跡々□守□置

天保八申九月吉日

頼主（*願主）同邑

「詰」は「積」、すなわち石垣積みの意味であろう。大意は以下のようになる。

広内村の庄吉が長年月かけてこの開きの石積みをして、完成させた。これからもしっかりと守っていききたい。

広内の山口家墓地・開谷家累代墓碑銘に庄吉の名があった。墓碑（墓誌）に「山口二郎右衛門庄七 文化元年十一月十四日 庄吉 天

過去帳類はいつさい残っていないとのこと。しかしささいな、位牌をみせていただくことができた。回出（くりだし）位牌のなかの板に法名と俗名などが記されていた。

法名 釈浄恩不退 文化元年十一月十四日 俗名庄七（吉の字を訂正）

法名 釈得門信士 天保七甲年正月十四日 俗名庄吉

法名 釈尼妙誓位 文政九戌天正月四日 庄吉妻

年齢（数え）が記された二名は生年がわかる。庄吉については年齢がなく推定となる。

庄七 八十六歳 一七一九（享保四）→一八〇四（文化元）

保七年一月十四日」と刻されていた（飯沼賢司「星野村における中・近世の水田開発の過程」『棚田学会誌 日本の原風景・棚田』二〇〇三）。ここにみえる庄吉が開削碑文中の「庄吉」と同一人物であることは確実である。開谷家は山口年行氏宅の屋号である。菩提寺の横山西光寺は昭和十九年（または三



写真3 碑周辺写真（右は山口毅利さん、庄吉の子孫である）



写真4 開谷山口家と庄吉位牌その1（上の左から4番目）



写真5 開谷山口家と庄吉位牌その2（上の左から4番目）

庄吉 不明 一七四八頃か→一八三六（天保七）

与吉 六十三歳 一七九〇（寛政二）→一八五二（嘉永五）

これらによって庄吉の家族についても、ある程度のがわかった。本文冒頭は、実は位牌の記述をもとに、推測を含めて書いたものである。世代から考えると庄七の子が庄吉と思われる。庄七の妻の位牌板がない。位牌板は初期のものはみな同筆である（四や月の字に特色がある）。後になって整理されたものらしい。庄吉は庄七の何番目かの子と思われる。仮に庄七の三十歳の子であったのなら一七四八年頃の生まれ、父に同じく八十年代後半まで生きた。その子与吉だとすると、庄

吉四十近くの子となる。庄吉の妻は、かれより一〇年早く文政九年（一八二六）に死んでいた（釋尼妙誓）。それでも七十代の後半まで生きた。当時としては高齢であろう。家族構成から考えれば、庄吉は健康で、長寿に恵まれた人物であった。ただ文政六年（一八一三）「生子」が死亡している（釋興寛信）。与吉の子、庄吉には孫に当たる子が、名前が付く前に死んでいる。文政十年には与吉女子生子も死んだ（釋尼妙善）。庄吉の晩年は孫、ついで妻、さらに孫を亡くすというつらい時でもあった。

さて最も重要なことは、碑文が刻された天保八年（一八三七）に、

庄吉がすでに死亡していたということだ。従来、石碑が刻まれたときに庄吉が故人であったとは想定していなかったけれど、このことを前提にすれば、碑文の読みは理解しやすいものとなる。

庄吉は天保七年の一月に死んだ。晩年は妻もなくし、働くことだけが楽しみで、ほかにさみしさを紛らわすことはできなかった。彼は積極的に広内村の開きの石積みに取り組んだ。碑文に「開き」とある。原野を開いたのか、桑畑を開田したのか、よくわからない。しかしあの谷に、全く田がなかったとは考えがたい。一部に畝町直しを含む新田開発で、石垣を積むことによる開田であった。「長々」とある。庄吉は「長々」と、石垣構築による開田にとりくんできた。畝町直し（耕地整理）を含むが、当時工事にあたって、一年間休耕することなどできない。冬季、本来なら麦を作るべき時に、すなわち旧暦の九月から四月までの八ヶ月間に工事を進めなければならなかった。

営々と耕地の拡大に努め、先導してきた庄吉は、完成を見ずにその冬に死んだ。それから半年が経過した。庄吉にとっては未完となった工事は、村人により完成された。さらに半年後、稲は順調に育っていた。「庄吉じいさんな、この稔った稲、見りゃー喜んだだろうに。ほんとうに、たいがい苦労したもんな」

だれかが碑文の彫刻を提案した。工事の完成と庄吉を追悼する碑文を刻もう。秋九月に実りの秋を迎えた。豊かに稔った田を見て、村人は庄吉の努力を回顧し、感謝し、かれを偲んだ。九月という碑文の日には石垣完成の日ではなからう。完成したあと、作付けされ、最初の収穫が得られた年と月、「天保八年九月」が選ばれた。

天保八年とあるが、正しくは八年は酉年で、申は七年である。干支の誤りにはいくつかの背景が考えられる。庄吉の没年との混同があ

ったのかもしれない。碑文は耕地改良碑であるだけではなく、追悼碑でもあった。「邑」が建立した碑文に庄吉個人の行為が強調されたのは、かれが石垣による棚田造成の先導的立場にあったからだ。跡々（後々）までの石垣保全（守・置）を誓っていることにも、そうした背景があった。邑は庄吉の努力をたたえとともに、かれの霊前に誓ったのである。

広内村は江戸時代には完全に独立した一村とはいええず、合瀬名の一部であった。いまも村山の権利や祭祀の負担は合瀬のうち、キタビラ（北平）合瀬が二、ヒビラ（日平）合瀬が二、広内が一、つまり五分一となっている。しかしここでは広内村が建立の主体となった。

庄吉の父、庄七については子孫に当たる山口毅利さん（昭和六年生まれ）が聞かれ、記憶されている先祖の話があるので、紹介しておきたい。

——うちじゃあ、「じろよみ（じろよむ）じいさん」て。そういつてたじいさん。じろうえもん（次郎右衛門）庄七。むかし。結核か何かで親父さんも死にたえて一人ぼっちにならしたけん、それで広内におられんで、久留米の魚屋に奉公にいかした。まだこわけものの時分、嫁さんももらわん頃。夜さり、寝もせんや、薬づと作って、朝も早よ起きて這い出して、えらい働かにやこづかれる。けんかして、星野でくらすめえかって、鷹取越えて、鹿里、そこに姉さん方がいちゃったげな。そのあねさん方に加勢しちゃうち、雨漏りのする家を修理して、広内のうちに住み着かしたげな。

そのつぎ三人子どもができて、一番親方どん（長男）が、おれが親方、分かれて出て行く、おっかさんの位牌だけはおれに拝ませろって、位牌を持って西の方へ分かれていったげな。三番

目はちったあ錢使いの荒かったけん、じいさんの一緒には住めなくて、開谷に住みつかせたげな。それで古かじいさんの、久留米の魚屋に番頭に行った苦労したじいさんの、あの墓におらすってこったい。

広内村の人間像が彷彿とされるエピソードである。苦労人で勤勉な性格が子・孫にも継承されこと、また一族の繁栄ぶりがよくわかる。庄吉はこの苦労人だった庄七の子として、田畑を継承し、そして石垣について耕地を拡大していった。

二 広内・西田の耕地の変遷―昭和の耕地整理

さて庄吉が造成した水田はいかなるものであったのか。じつは一帯の景観は昭和初年（六年頃かあるいはもう少し後）に行われた耕地改良・まちだおしによって、大きく変容している。それ以前の田は、こんなにちわれわれが目になっているような田ではなかった。そのことは現在の長老たちが、小学校時代にトロッコを引いて行われた大規模な造成工事を目撃していることにも明らかである。個人による工事で、主導は田中謙一氏だった。ご子息のまさお氏は福岡市南区臼佐四丁目にご健在だが、九十歳とご高齢で、ご家族によれば、工事当時の記憶はないとのことであった。

まず山口年行さんから話を聞こう。

――あの碑は小さい鑿で彫ってある。鎌で草とるころはわからんじゃった。何年か前、チップで草とるようになって美しゅうなった。それでわかった。こどもん時うわさできいた。わたしが昭和二年生まれ。もう小学校六年生ぐらい。そん前の二〇何枚かの田を広うした。垣（ガキ）をついちゃった。田中謙一さんが人を雇

うて、つきなられた。線路を敷いてから、トロッコやらすえち、チエーンブロックで太か石のつきなつた。学校帰り、わざわざ見に行った。

つぎに再度、山口毅利さんの話を聞く。

――あのきれいになつとる庄吉さんのあたりの田、たいがい、かわってしまつて、あそこは、むかしのことはわからんて、親父から、口ではきいていた。いま役場の公図もあそこだけ張り紙して、新しか紙で上に貼つつけちやるですよ。三十五・六年前、古いサクギ作りすることなつた時分、昼飯の時に、柴田文吾さんつて、その人の話して聞かせた。あそこは開き直しのあつたとき、四八枚あつたのが三枚になつとるとじゃんけ、のう（なく）なつたのが四五枚、それだけ少くな、なつとるつて。田中謙一さんの肝煎り。どうかなんなら、わがげ（我が家）んていするつてごたる（どうにもならなければ、全部自分が面倒を見る）、そんな気色（気分）の人。みんなを引き連れてトロッコひいて、大仕事を六〇年前にしちよるですよ。わたしらやつと覚えとる時分。文吾さんは山口家から養子に出たとき、田をもつていった。使い勝手の悪い田。扱おうたつて、とても自分たちだけで手をつけられるところじゃなかつた。謙一さんをとてあがめた話を私に聞かせた。

文吾さんの一軒まえ（一軒分）で四十八枚ですよ。それで三枚の大きな田の配給。あそこは四軒まえあるから全部では、へたすりゃー、その四倍あつたかもしれん。それが交換分合、区画整理。前の持ち主とはだいぶ入れ替わつた。

工事前の田の持ち分にに応じて広くなつた田の配給があつた。現在の田はこうして、このときに作られた。これ以前の田がいかなる形状で

あったのかは、星野村教育委員会が保管する明治二十二年（一八八九）の地籍図から想定できる。現在、天保の碑がある田の地番に該当する地番は、まわりを山林原野に囲まれた小規模な耕地である。穀利さんがいうように、貼紙があつて、その上も下も、地目は田や山林その他になっている。形状は今とは、まったく違う。

そこで問題になるのは、天保の庄吉碑と周辺はまったく彫刻時の形状をとどめていないのかどうかということである。庄吉碑自体は動いていないというのが、山口穀利さんの見解である。なぜなら碑文は自然石（じねんいし）、すなわち動かすことのできない石に彫られているからである。庄吉碑のある棚田の同じ並びの石積みには、同様な自然石がいくつかあるし、周辺の山にもそれが見られる。ここは開拓以前には岩が点在する山だった。開墾にあたっては、そうした岩のうち取り除けるものは除いた。埋めることができるものは埋めた。浅く土が乗るだけの場所には、鍬が当たらないように、小さな石を置いて目印にした。どうしても残るものはできる限り前面に置き、石垣の一部とすることにした。自然石を取り込むかたちで石垣を築いた。庄吉碑はまさしくそうした自然石である。その下に積まれた石は置かれただけで、力は効いておらず、上からの加重はない。

現在の石積みは昭和六年頃に積み替えられたものである。碑のある石垣の上の田は、星野村の人たちが石垣つきの名人と、誰もが認める山科藤夫氏の所有である。山科さんは棚田保存会・前会長でもある。名人は庄吉碑が自然石であることを確認した上で、石の大きさ、石積みの技法などからいって、その列の石垣には複数回の石積みがあると指摘した。

天保・庄吉碑の石積みは、全体はそうではないが、碑のある箇所に限

つていえば、天保八年に構築された形態をよくとどめているものである。なお碑文のある石の、向かつて左側は鑿岩されたことが明らかで、石を割るための「矢」（くさびあな）が明瞭に残っている。元来はもっと大きな石であつた。石が割られた時期は碑文の所在から考えて天保であろう。こうしたことをふまえれば、庄吉碑のもつ歴史的価値は、ますます高まるといえる。

（九州大学大学院比較社会文化研究院）

☆